

ヴェーバー＝ケラーマン他（著）
『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』を読む

On the "*Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie. Eine Wissenschaftsgeschichte*" by Ingeborg Weber-Kellermann etc. — on the Japanese edition in 2011.

河野 眞

Kono Shin

愛知大学国際コミュニケーション学部

Abstract

The present paper deals with the "*Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie. Eine Wissenschaftsgeschichte*" translated by Ingeborg Weber-Kellermann (1918-93) etc., which the present writer recently from German into Japanese on the basis of its third edition, 2003. Since the first edition written in 1969 had an important influence on the academic circle of German folklore studies. Through its critical viewpoint it has functioned as an enlightening and standard guidebook in this specialized field, not only in Germany, but also in other countries. In the Japanese edition, published on March 2011, instructions are given to the Japanese readers by the translator.

1. 書誌データ
2. インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンと共著者の略歴と著作
3. アードルフ・シュパーマーの弟子として
4. フォルクスクンデからフォルクスクンデ/ヨーロッパ・エスノロジーへ
5. 『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』の学史上の位置－他の数種類の学史との対比
6. 『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』の幾つかの論点
7. 『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』第三版の問題意識

(1) 書誌データ

筆者はこのほど、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンを主著者とするドイツ民俗学の一書を『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』のタイトルで翻訳・刊行した¹⁾。内容は、ドイツ民俗学の発展を、発端から今日の状況まであつかった学問史である。以下では、刊行を機に、著者とその著作に焦点をあてながらドイツ民俗学について案内を試みる。

現下の日本ではドイツ民俗学を扱う研究領域はなお定着していない。筆者がこの分野の基本書の翻訳を進めているのも、多少なりとも空白を埋めようとの意図に発している。とりわけ学史理解は、何らかの分野が手がけられるときには出発点のはずであるが、残念ながらその当然の手続きへの留意を欠いているために、日本の読書界では多くの誤認が起きている。あるいは、その誤認が特定の方向を示している面から見ると、原因は日本人のあいだの通念により多く存すると言ふべきであろう。それに気づく上でもドイツ民俗学史の知識が必要であるが、民俗学にかんする限り学史という問題意識そのものが希薄である。ちなみに、昨年、訳出・刊行したヘルマン・パウジンガーの一書についても、末尾にややくわしい解説をほどこしたが、やはり同じ趣旨にもとづいている²⁾。

とまれ、原書の書誌データとタイトルの直訳を挙げる。なお今回訳出したのは、主著者のインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン女史の没後にその門下生が加筆した版である。すなわちアンドレーアス・C・ビマーとジークフリート・ベッカーが加わって執筆された改訂第三版を底本としたのである。そこで、先ず初版以来のデータとタイトルの直訳を挙

-
- 1) インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン/アンドレーアス・C・ビマー/ジークフリート・ベッカー (著) 河野真 (訳) 『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』文叢堂 2011.
 - 2) 本書の前号所収の次の拙論を参照, 「パウジンガー『フォルクスクンデ』(1971)の構想－ドイツ民俗学の刷新への一齣を読む」愛知大学一般教育研究室「一般教育論集」第39集(2010), p.1-26.なおそこで主に解説したのは次の文献である。参照, ヘルマン・パウジンガー (著) 河野真 (訳) 『フォルクスクンデ: ドイツ民俗学－上古学の克服から文化分析の方法へ』文叢堂 2010 (Original: Hermann Bausinger, *Volkskunde - von der Altertumsforschung zur Kulturanalyse*. 1999 [3.Aufl.]).

げる。

Ingeborg Weber-Kellermann, *Deutsche Volkskunde zwischen Germanistik und Sozialwissenschaften*. [Sammlung Metzler, Abteilung Literaturwissenschaft und Geisteswissenschaften, M79] Stuttgart 1969.

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン「ドイツ・フォルクスクンデ（民俗学） — ゲルマニスティクと社会科学のあいだ」

Ingeborg Weber-Kellermann / Andreas C. Bimmer, *Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie*. [Sammlung Metzler, M79] Stuttgart 1985.

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン/アンドレーアス・C・ビマー/ジークフリート・ベッカー「フォルクスクンデ — ヨーロッパ・エスノロジー入門」

Ingeborg Weber-Kellermann / Andreas C. Bimmer / Siegfried Becker, *Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie*. [Sammlung Metzler, M79] Stuttgart 2003.

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン/アンドレーアス・C・ビマー/ジークフリート・ベッカー（著）『同』

このように1960年代末の初版の後、2回の改訂がほどこされ、都合3種類のヴァージョンとなっている。それに伴って、執筆者にも変化があった。初版はインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの単独著作であるが、第二版は先にふれたような共同執筆となった。また第三版は、主著者の没後の改訂である。これから知られるように、15年から20年ほどの期間をおいて改訂がなされているが、それは、本書が、専門分野への直近の情報を含めて案内するという性格であることによる。シュトゥットガルトに所在するメッツラー社の刊行による「メッツラー叢書」の一冊である。この叢書は、学問分野やそれを構成する小領域やテーマごとに編まれた数百点に上る案内書・入門書のシリーズとして知られている。専門分野のその諸テーマについて概説と書誌データを盛り込んだ体裁であり、ドイツの大学生へのややレベルの高い概論書である。そうした基本的な性格のゆえに、時代の推移と共に学界動向と書誌情報を新しくすることがもめられる。またその日本語版となれば、最新の版を底本とするのは当然の選択であろう。

しかしそこで一考を迫られることがあった。それは学史研究が併せもつ二つの側面の相関である。学史は、一つはその分野に関心をもちはじめた人々への案内であり、それゆえ直近の時期の学界状況と文献の情報を提供することをも課題とするであろう。二つには、しかしより本質的なこととして、その学問が何であるかを学問史の整理によって解明

するという修史の側面がある。本書の主著者が初版の序文に＜学問の歴史とは学問そのものである＞というゲーテの言葉を掲げたのは、その課題と取り組んだことへの表明と自負に他ならなかった。それは言い換えれば、その分野にかんする学問論であり思想である。この情報提供と学問論という二つの側面が、主著者亡きあとの増補改訂版において、なお優れて調和を保っているかどうかについて問題を感じさせるのである。これについては、後に少しふれるが、先ずは主著者と改訂版の共著者たちの略歴をあげる。

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン (Ingeborg Weber-Kellermann 1918-93) は長くマールブルク大学の民俗科教授としてヨーロッパ・エスノロジーの主宰であった。

アンドレーアス・C. ビマー (Andreas C. Bimmer 1943生) はマールブルク大学のヨーロッパ・エスノロジー研究所のアカデミシャー・オーバーラート (特任教授) で、専門領域は、学問史、習俗 (民俗行事) 研究、フランスとハンガリーのエスノロジー。

ジークフリート・ベッカー (Siegfried Becker 1958生) は、マールブルク大学のヨーロッパ・エスノロジー研究所の主任研究員で、専門領域は、学問史、事物研究、口承文藝研究、地域エスノロジー (ヘッセン、ベーメン、ハンガリー)。

(2) インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの略歴と著作

次にインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン女史 (1918-1993) の主要著作のリストを挙げる。

1957: *Ludolf Parisius und seine altmärkischen Volksliedern*. Berlin.

1965: *Erntebrauch in der ländlichen Arbeitswelt des 19. Jahrhunderts. Auf Grund der Mannhardtbefragung in Deutschland von 1865*. Marburg.

1967: mit Gerhard Heilfurth Hg.: *Arbeit und Volksleben. Deutscher Volkskundekongreß 1965 in Marburg*. Göttingen.

1969: *Deutsche Volkskunde zwischen Germanistik und Sozialwissenschaften*. Stuttgart 1969.

1971: - und Walter Stolle, *Volksleben in Hessen 1970. Arbeit, Werktag und Fest in traditioneller und industrieller Gesellschaft*. Göttingen.

1973: - und Annemie Schenk unter Mitarbeit von Michael Motzer und Walter Stolle, *Interethnik und sozialer Wandel in einem mehrsprachigen Dorf des rumänischen Banats*. (Bd.3 der Marburger Studien zur vergleichenden Ethnosoziologie). Marburg.

1974: *Die Deutsche Familie. Versuch einer Sozialgeschichte*. Frankfurt a.M., 9.Aufl.1988.

- 1978: *Die Familie. Geschichte, Geschichten und Bilder*. Frankfurt a.M. - 3.Aufl. 1987.
- 1978: *Zur Interethnik. Donauschwaben, Siebenbürger Sachsen und ihre Nachbarn*. Frankfurt a.M.
- 1978: *Das Weihnachtsfest. Eine Kultur- und Sozialgeschichte der Weihnachtszeit*. Luzern/München. - 2.Aufl. 1987.
- 1979: *Die Kindheit. Kleidung und Wohnen, Arbeit und Spiel*. Frankfurt a.M.
- 1981: - und Regine Falkenberg, *Was wir gespielt haben. Erinnerungen an die Kinderzeit*. Frankfurt a.M.
- 1981: Hg., *Eine preußische Königstochter. Glanz und Elend am Hofe des Soldatenkönigs in den Memoiren der Markgräfin Wilhelmine von Bayreuth*. Frankfurt a.M. - 3.Aufl. 1988.
- 1982: *Volksfeste*. Hamburg.
- 1982: *Das Buch der Weihnachtslieder*. Mainz. - 3.Aufl. 1986.
- 1983: *Frauenleben im 19. Jahrhundert*. München.
- 1985: *Der Kinder neue Kleider. Zweihundert Jahre deutsche Kindermoden in ihrer sozialen Zeichensetzung*. Frankfurt a.M.
- 1985: - und Andreas C. Bimmer, *Einführung in die Volkskunde / Europäische Ethnologie*. [Sammlung Metzler, M79] Stuttgart.
- 1987: *Landleben im 19. Jahrhundert*. München. 2.Aufl. 1988.
- 1990: *Vom Handwerkersohn zum Millionär. Eine Berliner Karriere des 19. Jahrhunderts*. München.
- 1991: *Die Kinderstube*. Frankfurt a.M. (Insel-Bücherei 1126).
- 1994: *Die helle und die dunkle Schwelle. Wie Kinder Geburt und Tod erleben*. München (Beck'sche Reihe 1035).

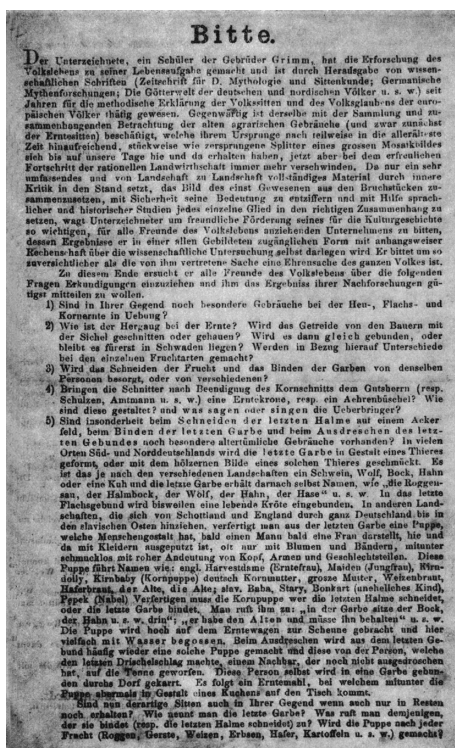
この他に専門誌への寄稿が多数あり、また民俗関係の記録映画を監修・製作している。

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンは、1918年6月23日にベルリンに生れ、1993年6月12日にマールブルクで亡くなった。研究者としての初期にはベルリン（フムボルト）大学において民俗学科の教授アドルフ・シュパーマーに師事し、1940年に学位を得、さらに1946年から1959年までドイツ学術アカデミー（東ドイツ時代のベルリン）に付設された「ドイツ民俗学インスティトゥート」（Institut für Deutsche Volkskunde an der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin）の助手として勤務し、1960年にその主任となった。しかし同年中に西ドイツのマールブルク大学の民俗学科にあたる

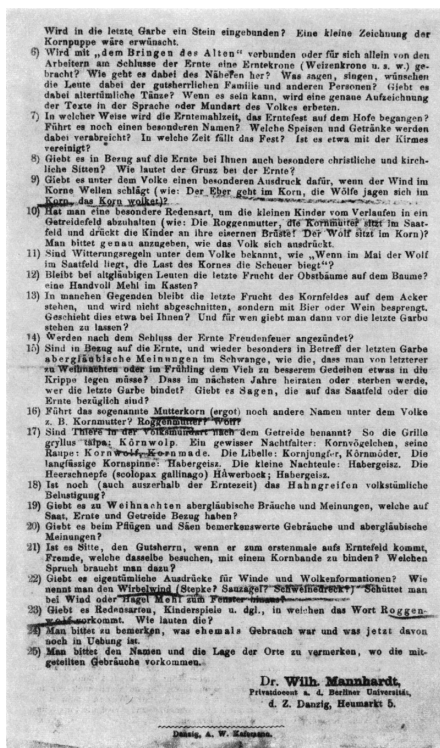


図版 1：インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン

図版3：地主貴族と刈り取り労働の女性たち



図版 2：マンハルトのアンケート用紙



「中部ヨーロッパ民俗研究所」(Institut für mitteleuropäische Volksforschung)に移った。そこで研究に従事し、1963年に教授資格を得た。1968年にマールブルク大学民俗学の教授となり1983年の定年退官までその地位にあった。

最初の著作は19世紀プロイセンの一言論人について民俗学の分野での活動の掘り起しであった。ルードルフ・パリジウス (Ludolf Parisius 1827-1900 生 GardelegenST 没 Berlim) はプロイセンの法曹家にして出版をめぐる諸問題にかかわったりベラリストで、ドイツ進歩党のメンバーとして数年間ではあったが国会議員にもなった。そのかたわ

ら、今日のザクセン＝アンハルト州の一部でマルク・ブランデンブルクの発祥地でもあるアルトマルクが出身地であったことから、その地方の民謡の収集を手がけた。インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの処女作は、それを19世紀の農村の現実に照らして読み解く試みであった。見ようによれば、女史の生涯の研究方向を特徴づける関心がすでに明示されていたとも言える。事実、次に刊行された主著の一つは、その方向での大きな結実であった。大著『十九世紀の労働世界のなかの収穫習俗』（1965）で、それには「マンハルトの1865年のアンケートに依拠して」というサブタイトルがついている。

ドイツ民俗学の発端をどこにもとめるかはさておき、ロマン派の思潮がその後の方向を決定したことは疑えない。となると、その最も大きな存在はグリム兄弟である。またその視点を学び、民俗学に特化した研究に邁進したのが兄弟の教えを受けたヴィルヘルム・マンハルト（Wilhelm Mannhardt 1831-80）であった。その経緯は本書のロマン派の章に詳しいが、マンハルトはまた大規模なアンケート調査を実施したことで民俗学の歴史のエポックをつくっている。マンハルトが、収穫習俗の際に農民が行なう特異な動作に着目して、ドイツ語圏を中心にヨーロッパ諸国の一万人の関係者にアンケートを送付したのが1865年であった。そのアンケートの内容は、収穫にあたって最後に残した穀穂をどのような形に仕上げるかに特に注目しており、またそれが古いゲルマン神話に遡るとの予想を前提としていた。アンケートは約1200通の回答を得ることになり、それがベルリンの国立図書館に現存する。ヴェーバー＝ケラーマンはその資料を改めて点検して、マンハルトが読解を意図したゲルマン神話ではなく、むしろ同時代の労働とその背景にある社会的関係を読み解いたのである。とりわけ農民と地主や地主貴族との関係、労働の現場を自己の領域とみなした働くものの自負と権利意識などであり、それらをめぐる地域的な差異をも併せた説明であった。

さらに言い添えれば、マンハルトを批判的に読むことは、その限りにとどまらない意義をもっている。マンハルトの視点を受け継ぎ、マンモス的に巨大化したのがイギリスのジェームズ・ジョージ・フレイザー（James George Frazer 1854-1941）だったからである。フレイザーの『金枝篇』（The Golden Bough 初版1890）の序文は大著の方法論でもあるが、そこにはマンハルトから着想を得たことが明記されている。20世紀の30年代から始まるフレイザー流の研究手法への批判が＜マンハルディアン批判＞と呼ばれるのはこの系譜のゆえである。これまた本書の「ウィーン学派とスウェーデン学派」の一節に詳しい。なおこのあたりの学史と思潮の変遷について、筆者はやや詳しくとり上げたことがある³⁾。概括的に言えば、ロマン派、さらにネオロマン派の思潮に彩られた民俗理解を、調査がなされた時期の特定の歴史的・社会的条件に置きなおして説明しようとするのが、ヴェーバー＝

3) 参照、拙著『ドイツ民俗学とナチズム』創土社 2005, passim.

ケラーマンの姿勢であり、それは取りも直さずドイツ民俗学を彩っていた神話学のヴェールをひきはがす作業でもあった。節目の年次をシンボリックに見るなら、ドイツ民俗学のロマン派とネオロマン派⁴⁾の時代は、マンハルトの1865年のアンケートに始まり、ヴェーバー＝ケラーマンが同じ資料をリアルな視点で読みなおした1965年で終わったと言ってもよい。そのちょうど100年はドイツ民俗学の栄光と挫折の百年でもあった。

女史の仕事はその後、民衆の家庭、女性史や子供や被服にも延びてゆくが、いずれもリアルな社会関係と社会関係を背景にした当事者の意識・心理を解明するという行き方を見せる。たとえばグリム兄弟の昔話についても、そこに反映されているのは、中世や上古の神話ではなく、端的に近代の市民社会であり、＜グリム兄弟の昔話のスタイル＞は19世紀に入ったころの小市民のあいだでの＜子供部屋の形成＞と対応していると断言している。

女史の研究の一般的な特徴はこれくらいにしておくが、その叙述はどれも明快な構成をもち、メリハリがきいている。本邦ではすでに『ドイツの家族』⁵⁾が手にとることができるが、もっと多くが紹介されてもよいであろう。と言うより、実際にはクリスマス習俗の歴史の本邦における紹介などでは、ヴェーバー＝ケラーマンの著作を下敷きにしたり部分的に引き写しているものなどもあり、(よいか悪いかはともかく)明記されないまま女史の研究成果は断片的に本邦にも伝わってはいる。特に晩年の大作『十九世紀の農村生活』(1987)は各方面に刺激となるはずの名著と言ってもよい。

他にも注目すべきものとして『ヘッセンの民衆生活1970年 ― 伝統社会と工業社会のなかの労働とウィークデーと祭日』(1971)がある。書物としては100ページ余りと小ぶりで、同時代の民衆生活を輪切りにした観がある。それだけでも独立して読むことができるものであるが、これは女史が手がけた記録映画の解説書という性格にある。ヴェーバー＝ケラーマン女史は、1960年代末から民俗事象を記録映画として把握することを提唱した。

4) ロマン主義 (Romantik) とネオロマン主義 (Neo [Neu] romantik) の違いは一概には言えないが、一つの目安として、ロマン主義の特定の要素が強力に作用して一定の方向づけが起きたことをもってネオロマン主義を理解することができる。ロマン主義の場合、近代化の進展を前に多様な (たがいに矛盾する) 要素があらわれ、その複合として、政治を含む現状認識 (人間性の開放や自由主義への志向)・歴史観・宗教観などいずれにおいても種々の方向性を併せもち、解決不能による分裂症のような心理現象をも伴った。それに対してネオロマン主義では、回顧性、遡源・原初志向、農村回帰 (農村ロマンティズム)、中世回帰 (ゴシックへの憧憬)、神話偏愛 (貴種跪拝) などが優勢になり、それらはナショナリズムや人種論とも結びつく動きを見せた。その面では、ロマン主義が含んでいた退嬰性などのマイナス面が強まったと言えるであろう。現行の農村行事をア・プリオリにゲルマン性 (さらにアーリア人以来の伝統) とみなすような思いこみも強まったことは、文化人類学・民俗学の分野でのイギリスのフレイザーにおいて特にみとめられる。

5) 参照, インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン (著) 鳥飼美緒子 (訳)『ドイツの家族: 古代ゲルマンから現代』勁草書房 1991.

そして自らも実践したが、その成果は10篇を超える作品に結実している。

(3) アードルフ・シュパーマーの弟子として

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン女史について見逃せないのは、ベルリン大学の学生として民俗学に進んだ頃から若手研究者として研鑽を積んだかなり長い期間にわたって、アードルフ・シュパーマーに師事したことである。これは一時期の師匠という以上に大きな意味があり、女史はその師弟関係に言及することが生涯を通じて何度もあり、またドイツの学界でもその系譜はよく知られていた。アードルフ・シュパーマーはベルリン大学の最初の民俗学科の教授であるが、それに先立つ1920年代の少壮の頃からドイツ民俗学の一方の代表者とみなされた俊秀であった。分類の角度からは、民俗学における「心理学的方法」の代表者である。その研究の方法論と実際についてはすでにまとめたことがあるが⁶⁾、ナチ時代の難しい局面のなかで活動した学究であった。その時代にベルリン大学のポストに就いたのであるから、すでにそれ自体について学史の面では見解の相違が見られる。ヴェーバー＝ケラーマンの証言では、ナチスがカール・フォン・シュピースを配置しようとしたのに対して、ナチスを嫌う有力なゲルマニスト、アルトゥール・ヒューブナーがそれを斥けてシュパーマーを就任させたとされる。しかし20世紀の終わり頃に、永年ナチスをめぐる民俗学者の動静の実態解明をライフワークとしたハンヨースト・リックスフェルトが論じたところによれば、シュパーマーはすでに1920年代からナチス教員同盟のドレスデンにおけるリーダーであり、その役割を期待されてベルリン大学へ入ったとされる。そのいずれが事実であるかはここでは論じないが、ヴェーバー＝ケラーマン女史は終生シュパーマーを擁護し、その学統を主張した面がある。

一般論を言えば、ドイツ民俗学において微妙なのは、師弟関係とナチズム問題がからんでいることで、それはシュパーマーとヴェーバー＝ケラーマンに限ることではない。レーオポルト・シュミットもヘルマン・バウジンガーもそれぞれその師筋に当たる人物の評価には神経質であったところがあり、またその苦い糧をも取り入れながら学問方法と立脚点を築いたと言える。もっともシュパーマーについて付言するなら、傑出した学究であることは疑いを容れない。同じく1920年代以来ドイツ民俗学の花形であったハンス・ナウマンなどと較べると、資質が上で品格を感じさせもする。その研究の実際に就いては訳者は何度か内容を紹介しているが、先に言及した拙著では、シュパーマーの初期の好著である『ドイツ港湾諸都市における刺青慣習』を例にとってその手法を分析した。また20年以上前になるが、代表作『念持画片』が復刊されたのを機に勤務校の紀要に紹介したこともあ

6) 参照、拙著『ドイツ民俗学とナチズム』第1章第7節。

た⁷⁾。なお念持画片と訳した術語が指すのは、個々人の私生活のなかでの信仰（つまり念持）のための小さな聖画で、イコノグラフィー研究でもほとんど取り上げられないような片々たる種類のものであるが、その図案の変遷を神秘思想家の観想から民衆財へという脈絡で解明を試みたもので、未完の大著である。さらに言えば、訳者が最近連載している「シンデレラの構造と源流」も、アードルフ・シュパーマーの遺作『信心深い女中さん』（1971）の研究にヒントを得ている⁸⁾。

(4) フォルクスクンデからフォルクスクンデ/ヨーロッパ・エスノロジーへ

初版と第二・三版との表題の違いについてふれておきたい。初版のタイトルは『ドイツ民俗学 — ゲルマニスティクと社会科学の間で』である。それが第二版から『フォルクスクンデ/ヨーロッパ・エスノロジー入門』となるのであるが、そこに焦点を当てて解説を試みる。

民俗学はドイツ語では伝統的に“Volkskunde”と呼ばれてきた。しかし初版の序文にもあるように、この名称には独特の語感、それもネガティブな語感が払拭できなかった。それ自体も重層的であるが、簡単に言うと次のような問題点である。

一つは、ナチス・ドイツ期にドイツ国民を指すのに“Volk”が多用されたことである。＜フォルクスワーゲン＞や＜フォルク・ラジオ＞や＜フォルク浴槽＞や＜フォルク冷蔵庫＞など、何もかもにフォルクが冠せられた。ナチスのポスターで最も一般的なのも“Ein Volk, ein Reich, ein Führer”すなわち＜一つのフォルク、一つの国、一人の指導者＞であった。また＜Volksgemeinschaft＞（民族共同体）という集団概念も喧伝された。そうした過去があったため国民の総体をフォルクの語で言い表すのは倒錯した心理が支配した近い過去との接続を感じさせることになり、それゆえフォルクの語から距離がおく方がよいとの見方がひろがったのである。注目すべきは、そういう声がかかったのは、戦後まもなくの時期を除けば、むしろその後の1960年代末から1970年代初めであった。世界各地で学生運動・学園紛争が起きた時代でもあり、その頃、ドイツではナチズムの誤りへの風化に対して若い世代が敏感に反応した。名称変更にもそうした時代思潮も関係していたところがある。

しかしまた＜フォルク＞は、ドイツ人には、ナチ党の使用やその前史という問題性を除けば、たいそう実感の伴う語でもあり、ナチ時代との重なりがそれほど意識されなくなると特に悪い印象というわけでもなくなった。それゆえ西ドイツ時代にドイツの良心と称え

7) 参照、拙論「念持画片（Kleines Andachtsbild）の成立とその周辺 — A. シュパーマーに依拠しつつ」（愛知大学『外国語研究室報』第9号 昭和60[1985]年3月, p.39-70.）

8) 参照、拙論「シンデレラの構造と源流」愛知大学文学会『文学論叢』第86輯（昭62[1987]年12月）, p.146-123.; 第87輯（昭和63[1988]年3月）, p.190-169.;

られたリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領の1985年の国会演説「荒れ野の四〇年」でも、ドイツ国民への呼びかけに＜folk＞語がもちいられていたりする。さらに言い添えると、“Volk”から派生した語に“Volkstum”と“völkisch”がある。＜folkstroom＞は1810年に＜体操の父＞（Turnvater）とも呼ばれることになったフリードリヒ・ヤーンが形容詞形“volkstümlich”と抽象名詞“Volkstümlichkeit”ともども造語した⁹⁾。いずれも19世紀を通じて一般に定着したが、最も問題の大きかったのは＜folkstroom＞で、人によってその籠める意味に開きがあった。ナショナリズムや、さらにナチズムに関与した人々がもちいる一方、ナチズムに距離をおいたり、それどころか抵抗姿勢をとった人々もキーワードにしていた。前者の極例としてはオットマル・シュパンの社会理論やナチ党のスローガンに頻繁に現れたことであり、後者ではカトリック教会の汎ヨーロッパ的な立場に立つ思想家や、また白薔薇で知られる抵抗者クルト・フーバーの語法である。それゆえ、前者を＜民族体＞、後者を＜民衆体＞というように訳者はこれまでも使い分けてきた。しかしドイツ語は一つであり、ドイツ人の論争なると、互いに使っている語が同じであるために、自己の位置が確認しづらいという問題をみせている。と同時に、形容詞形“volkstümlich”と抽象名詞“Volkstümlichkeit”となるとまた別で、それらは思想性があまり強くはなく、土俗的、土俗性といった意味で普通につかわれると言ってもよい。

また“völkisch”は、誰が造語者であるかについて諸説があるが、その語を言い立てるナショナリズムの運動が20世紀の初めころから姿をみせはじめた。現代史では＜folkisch運動＞と呼ばれる動きであるが、単一の組織によるのではなく、ワンダーフォーゲルの一部を含む青少年運動から、数種類のカルト集団にいたるまでいくつもの動きがそこには含まれる。語として何処か坐りが悪いところがあったのであろう。1920年代を頂点として語法として衰えていった。あるいはナチ党の機関紙のタイトルを花道として消えていったとも言える。すなわち「folkischer Beobachter」である。それもあって、この語は、今日ではほとんど口にされないようである。他にも“volkhaft”やその抽象名詞形もあるが、それは省略する。

„Volkskunde”に戻ると、それは一種の一般語でもあったが、また学術用語にもなった。つまり＜民俗学＞にあたる専門分野の名称である。ちなみに日本でも、最近、ドイツでの学問名称の変更が一部で話題になっている¹⁰⁾。それは2008年にドイツの民俗研究者が日本で講演を行ない、名称変更にとさらに意味をこめた解説をしたことによるらしい。

9) “Volkstum”とその派生語のドイツ文化における意味については、前掲の拙著で一章を設けて考察した。参照、『ドイツ民俗学とナチズム』第一部5節

10) 参照、上杉富之・松田睦彦(編)『戦後民族学／民俗学の理論的展開—ドイツと日本を視野に一』成城大学大学院文学研究科・民俗学研究所 2008年3月。

居合わせた日本の研究者たちのなかには、それが何が大変なことであるかのように受けとめた人もいたようである。しかし講演をしたドイツ人はその話題が外国人にすぐに伝わる種類のものかどうかよく考えていず、つまり自己を相対化するところがなかったようである。それを言うのは、フォルクスクンデ＝民俗学と等号でつないで受けとめると事情がつかみにくいからである。言葉のもつオーラとでも言うべきか、語感というべきか、語彙のなかの一つ一つの意味はそれぞれがその国語のなかでもっている連関を措いてはあり得ない。それゆえ背景も脈絡も異なる外国語と対比させるのは無理であるが、理解の便のために敢えて言えば、＜フォルクスクンデ＞は強いて言えば＜たみのおぼえ＞とでもいった感じの語である。つまり古めかしく、定義をしようとすると思えどころがなく、聞きようによっては異様な響きでもある。邦語の＜民俗学＞が必ずしもそうした問題点をかかえていないとすれば、フォルクスクンデの名称変更限定する限り、大きな刺激として受けとめる必要はない。なお言い添えれば、＜フォルクスクンデ＞という学問名称を止めてほかの何かに変更することが強く言われた一つの節目は、1970年にヘッセン州のファルケンシュタインで開かれたドイツ民俗学会の特別部会で、その記録は「ファルケンシュタイン・プロトコル」として知られている¹¹⁾。

学問名称の変更自体は語感の問題もあって外国にはあまり意味が無いが、そこに込められた問題意識は無視するわけにはゆかない。フォルクを民（たみ）と訳せるかどうか別にして、仮に大まかではあれ対比させれば、民衆の総体、あるいは民俗学の対象となるような人間の集まりに＜たみ＞といった言葉をあてはめると、それだけで対象を見失うのではないかという反省である。民衆と言うにせよ、大衆と呼ぶにせよ、一様で同質のかたまりがあるわけではない。さまざまな区分による諸集団の複雑な絡み合いであり、しかも絶えず流動している。それを＜フォルク＞なり＜たみ＞なりの語でひっくりめると、静止して自足した民衆像ができてしまう。つまり現実に生きる人間の動きも社会性も見えなくなる恐れがある。その点で思い出されるのは、ベルト・ブレヒトの発言であろう。1934年にブレヒトは、「真実を書くための五つの困難」の一つとして、“Volk”の代わりに“Bevölkerung”と言う人は、それだけで＜あまたの欺瞞を支えるのを止めることになる＞と説いた。これは意表を突くようなブラック・ユーモアでもある。＜ベフェルケルング＞は中性的で無味乾燥な言い方で、＜フォルク＞とのあいだには、敢えてたとえれば、子供が＜歩き始めた＞という代わりに、＜二足歩行に移行した＞とでも言うような落差がある。なお民俗研究者としてこのブレヒトの言葉に注目したのはバウジンガーで、1959年の教授資格申請論文

11) *Falkensteiner Protokolle*, bearbeitet und herausgegeben von Wolfgang Brückner. Frankfurt a.M. 1971.

『科学技術世界のなかの民俗文化』（1961年刊）の序文の冒頭にこれを置いた¹²⁾。以後、民俗学の分野ではすっかり定着して、必ず言及されるものとなっている。

以上は<folk>と<Folkstunde>の言語使用としての背景にふれたのであるが、そうした経緯があって、Folkstundeを別の何かに言い変える必要性が起きた。その際、Folkstunde／ヨーロッパ・エスノロジーという併記となったのは、これまた幾つかの要因があった。一つは消去法的な理由で、先行して“empirische Kulturwissenschaft”すなわち<経験型文化学>ないしは<経験的文化研究>の名称がすでに力をもっていたことである。それはヘルマン・パウジンガーが率いるチュービンゲン大学の民俗研究が名乗った名称である。本書、つまり第三版でもこのチュービンゲン大学の圧倒的な影響力に対する複雑な思いを改版者たちは漏らしている。インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン女史の場合は、そういう対抗感情はなかったであろうが、住みわけの意識はあったかも知れない。そうするとより大きな枠組みとしてはヨーロッパである。それには、さまざまな民族が複雑に絡み合う現実にも目を向けざるを得ないという不可避の課題もあった。インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン教授が主宰したマールブルク大学の民俗学科では特にルーマニアのパナト地方をはじめ南東ヨーロッパでのドイツ人とスラヴ系やラテン系の諸民族のとの混合地域もフィールドワークも手がけていたという事情もあったようである。

このヨーロッパ・エスノロジーの名称はそれが採用された1970年前後よりも、むしろ今日においてその名称の意義が高まっている面がある。現今のドイツ社会のキーワードの一つは“Europöisierung”（ヨーロッパ化）である。EUが存在感を高めるなか、生活次元でもヨーロッパを枠としてとらえる局面が強まっている。日常的に起きる社会問題から個々人の心理まで多岐にわたってヨーロッパへの参入が課題になっている。それもあってヨーロッパ・エスノロジーを名乗る大学や研究機関が増えているのは今日の趨勢で言うてよい。シンボリックな一例を挙げると、ベルリン（フムボルト）大学の民俗学科も、東ドイツ時代からの移行期を過ぎた今日、ヨーロッパ・エスノロジーを標榜する拠点となっている。主宰するのはヘルマン・パウジンガーの高弟の一人ヴォルフガング・カシューバである¹³⁾。

12) 次の拙訳を参照、ヘルマン・パウジンガー（著）河野（訳）『科学技術世界のなかの民俗文化』文楫堂2005, p.11（原著：Hermann Bausinger, *Volkskultur in der technischen Welt*. 1961, 第2版1986 翻訳には第2版の序文を収録）

13) ヴォルフガング・カシューバの日本への紹介では、同教授が2008年12月に韓国民俗学会の主催でソウルで行なった講演の拙訳を参照、ヴォルフガング・カシューバ「ヨーロッパとグローバリゼーション：ヨーロッパ・エスノロジーへの新たな挑戦」－カシューバ（ベルリン大学ヨーロッパ・エスノロジー学科教授）の韓国ソウルでの講演（2008年12月12日）の翻訳と解説 Original: Wolfgang Kaschuba, *Europa und die Globalisierung: Neue Herausforderung für die Europäische Ethnologie*. Ein Vortrag in Seoul, 12. XII.2008 2010年3月 愛知大学国際問題研究所「紀要」第135号, p.271-295.

(5)『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』の学史上の位置－他の数種類の学史との対比

本書の邦訳によって、筆者は、ドイツ民俗学界において特色のある学史研究の4種類を紹介したことになる。いずれも他の外国語には訳されていない、その点ではドイツ民俗学の歴史的な流れを概観することに限っては日本語を介してでもかなり視界が開いたはずである。その4種類の学史研究は相互の関係の面でも興味深いところがあるので、簡単にふれておく。

第一は、戦後かなり早い時期にレーオポルト・シュミットが世に問うた『オーストリア民俗学の歴史』である。原書は1951年で、拙訳は1992年であった¹⁴⁾。もっとも、それに先だって1987年から89年にかけて愛知大学国際問題研究所『紀要』に7回にわたって連載したものをベースにしたので、その時点で情報を供していたことになる。レーオポルト・シュミットは第二次世界大戦後のドイツ語圏において民俗学を再建する課題をになった第一世代にあたる。その立場から、再出発に臨んで改めて民俗学とはどういう学問で、なぜ逸脱が生じたかを歴史的に学問思想・立脚点、そして諸々の学説において検証したのである。

第二は、マティルデ・ハインの「ドイツ民俗学とその方法」(1962年)で、その翻訳・紹介は1987/88年にであった¹⁵⁾。原文の書誌データを挙げると、ゲルマニスティクの大部な案内書である『ドイツ文献学綱要』の第三巻に第V部として「フォルクスクンデ」が設けられ、そのはじめの箇所ではフランクフルト大学の員外教授であったマティルデ・ハイン女史が学史を担当したのである。その第二版は1962年版が初版に較べて加筆がなされており、それを訳出した。このハイン女史の学史解説については二点にふれておきたい。一つは、それが早い時期に日本において識者の関心の圏内に入ったことである。1960年に平凡社から刊行された『民俗学大系』の第二巻『民俗学の成立と歴史』のなかで、関敬吾氏が「独逸民俗学の成立と発展」を担当されたときに主な参考書となったのはこの文献の初版である¹⁶⁾。それを言うのは、20世紀の20年代末から第二次世界大戦後に及ぶ局面に

14) 参照、レーオポルト・シュミット(著)河野(訳)『オーストリア民俗学の歴史』名著出版1992.

15) マティルデ・ハイン(Mathilde Hain 1901-83)はユーリウス・シュヴィーテリング(Julius Schwietering)の学徒として、民俗研究に機能主義を導入したことで知られ、またフランクフルト大学で民俗学を担当した。その観点からの簡便な学史理解である次の翻訳を参照、マティルデ・ハイン「ドイツ民俗学とその方法」(Original, 1962)愛知大学文学会『文学論叢』第86輯(昭62[1987]年12月), p.146-123.; 第87輯(昭和63[1988]年3月), p.190-169. (Original: Mathilde Hain, *Volkskunde und ihre Methode*. In: *Deutsche Philologie im Aufriss*, hrsg. von Wolfgang Stammer, Bd.III, 2.Aufl. 1962, Sp.2547-2570.)

16) 参照、関敬吾「独逸民俗学の成立と発展」大間知篤三[他・編]『日本民俗学の歴史と課題』(日本民俗学大系/第1巻)平凡社1960.

におけるドイツ民俗学を、(1)社会学的方法、(2)地理学的方法、(3)心理学的方法、(4)機能主義的方法の4種類に分類されているが、それはハインの整理の仕方を踏襲したのである。二つ目はハインの学史が、その当時のドイツ民俗学界の展開に有機的にかかわり、ある種の先見性をも示していたことである。具体的には、1962年の改訂版では、その前年に刊行されたヘルマン・パウジンガーの最初の主要著作『科学技術世界のなかの民俗文化』について早くも好意的で正確な、同時に問題点にもふれるコメントが加えられていることである。他にも、当時、同じくドイツ民俗学界の一角を担う存在となろうとしていたレーオポルト・クレッツェンバッハーについても評価をあたえており、ハイン女史が、次の世代の発見においても過たなかったことがうかがえる¹⁷⁾。

第三が本書で、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの単独による初版は1969年に刊行された。その第二版が1985年で、今回底本とした第三版は2003年である。

第四がヘルマン・パウジンガーの学史研究であるが、本書の初版と第二版の間に入っていることには注目してよい。これは学史に特化された著作ではなく、独自の概説書として1971年に刊行された『フォルクスクンデ — 上古学から文化分析の方法へ』の一部で、全4章のうち最初の一章が学史の検討に当てられている¹⁸⁾。

以上のうちレーオポルト・シュミット、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン、ヘルマン・パウジンガーの三人について敷衍すると、三者とも学史を執筆したのは、学問方法を確立するにあたって学問史を独自に洗い直して、その専門学への関わり方を過去の系譜との関係において明瞭ならしめる必要性を覚えたからであった。その点では、近年、数種類が刊行されているような編著形式で、10人あるいは数十人が分担して執筆する概説書や入門書とは趣が異なる¹⁹⁾。もとより、一専門分野を構成する個別領域の全体にわたって内容に立ちいたって担当することは通常は難しいので、多数の寄稿による概説書もそれはそれで意味があることは否定できない。特にさまざまな個別領域の文献の情報量などでは、

17) レーオポルト・クレッツェンバッハー (Leopold Kretzenbacher 1912-2007) は、文化史の該博な知識に加えて南東ヨーロッパ研究の第一人者であったために、ドイツ民俗学のやや保守的な思潮を受け継いでいたにも拘らず、(ミュンヘン大学の民俗学科を主宰したこともあって) 重要な地歩を占めている。その学問傾向については次の拙訳を参照、レーオポルト・クレッツェンバッハー (著) 河野 (訳) 『民衆バロックと郷土 — 南東アルプス文化史紀行』1988 名古屋大学出版会 1988. (原著: Leopold Kretzenbacher, *Heimat im Volksbarock. Kulturhistorische Wanderungen in den Südostalpenländern*. 1961.)

18) 参照 (前掲)、パウジンガー (著) 河野 (訳) 『フォルクスクンデ』文緝堂 2010.

19) 多数の寄稿によって成り立つ概説書のなかで近年の標準的な企画には、ブレードニヒ (ゲッティンゲン大学教授) の編集による次の文献がある。参照, Rolf Wilhelm BREDNICH (Hg.), *Grundriß der Volkskunde. Einführung in die Forschungsfelder der Europäischen Ethnologie*. Berlin 1988, 3.erw.Aufl.2001.

その形態において詳細な情報が盛り込まれるのは強みである。が、その半面、そうした種類は必ずしも編者の個性でまとめられるとは限らず、その学問が何であるかという思想の表明としては平板になる傾向は否めない。また単独で学史を執筆するにはよほどの力量を要する。その点では、斯会における戦後の草分けの一人であるハイン女史に加えて、続く三人はいずれも規模が大きい本格的な学究である。さらに互いの関係も興味を惹くところがある。

レーオポルト・シュミットは戦時中から客観的な学問としての民俗学を標榜し、それゆえ時流に押されず、時局のなかで優遇を受けることもなく5年もの兵役とソ連での捕虜生活を強いられた人物であった。エピソードを挙げると、レニングラード攻防戦を生き延びた後、その才能を評価したアードルフ・シュパーマーが有力な出版社の設けたW.H.リール賞を受賞させ、その効果であったかどうかは不明であるが、辛うじて後方部隊に配属換えとなったとの研究報告がある。レーオポルト・シュミットは博物館人であったが、その研究姿勢が客観性の重視にあったことは、若くして発表した<思想無き博物館>によく現れている。ナチス・ドイツが博物館をゲルマン文化の栄光をたどる教育の場と位置づけた時代であった。その状況下で<思想無き>とは<イデオロギーを排除する>との表明に他ならなかった。戦後の旺盛な執筆と調査活動、また展示企画においても、客観性がその指標であった。その視点から、民俗事象への関心の流れから、それぞれの時代の派手な理論の蔭で地道に続けられていた事実重視の系譜をたどったのである。それは必然的に、理論やイデオロギーに傾斜した人々、とりわけナチズムとからみ合った人々をその脈絡において明るみに出す作業であり、しかも批判の対象になった人々のなかには同窓の先輩も少なくなかった。その点では、レーオポルト・シュミットの民俗学史は第二次世界大戦後の出発点として意義を減じない。

しかしこれに対して、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンは、レーオポルト・シュミットの言う客観性によって、(博物館人の視点として不可避であるとは言え)個々の事物や文物が生身の人間存在や社会関係から切り離される危険性があることを批判した。そして社会的な存在としての人間あるいは人間集団の表出としての民俗事象を問うたのである。またその実際として、ヴェーバー＝ケラーマンは収穫習俗を始めとする多数の研究成果を世に問うた²⁰⁾。

ヘルマン・バウジンガーの場合もレーオポルト・シュミットを越えようとする志向が(初期の諸著作には)いわば通奏低音のように響いており、その批判は強度に思想的・方

20) 『収穫習俗』(1965)のなかでは、特にレーオポルト・シュミットの道具(農具)研究の指標的な著作である『形態聖性』への批判的な考察がみられる。これについては前掲の拙著で言及した。参照、『ドイツ民俗学とナチズム』第一部5節

法論的である。バウジンガーによれば、レーオポルト・シュミットは客観性と事実性を標榜するが、そもそも客観的であると言い立て、また受けとめられるという関係を探っていくと、＜少し前の時代に優勢であった思想や視点に合致している＞がゆえにそれが成り立っていることが見えてくる。これは社会科学の方法論をめぐるユルゲン・ハーバーマスとも重なる視点であるが、バウジンガーの議論では、そうした原理的な問題にまで踏みこんでいる。そして民俗学が特にロマン派思潮のなかで形成されたことに遡って、学問を生成させた幾つかの思念を検証し、とりわけ民俗学が＜歪みを抱えて生れ＞、また歪みではあってもそれを必要とする素地があったことをも直視し、その自己の生成にかかわる歪みを意識化する緊張がこの学問を意義あるものたらしめると考察した。バウジンガーはそれをさまざまな角度から検討したが、その一つを挙げると、社会学と対置して民俗学のマイナス面を指摘していることがさしずめそれであろう。すなわち近代社会が進展するなかで二つの学問が生れたが、一つは現実と関わりとうする＜前向きの処方箋としての社会学＞、それに対して＜保守的な処方箋としての民俗学＞であったと言う。しかしまた社会学が民俗学を組みこむことには無理があるともする。それは他ならぬ、民俗学がマイナスの面をもつからであり、そのマイナスの面に潜む契機は民俗学の他の学問分野では代替し得ない特質であると言う。民俗学が近代世界の進展を前にした保守的な処方箋であるとは、この学問分野の生成が基本的には＜退行＞に負っているからであるとされる。退行とは元は心理学の用語で、たとえば幼児が弟や妹の誕生によって、親の愛情を取り戻すために、一旦確立した成長の諸段階（排泄など）を放棄する防衛機制をいう。民俗学が近代において成立したのは、社会的な次元にまで拡大した広義での＜退行＞に起因する、とバウジンガーは指摘する²¹⁾。しかしそれは近代の進展に真っ向から対立する種類の後戻りではなく、進展の大枠が前提として共有されるが故に可能ともなり必然的ともなる種類のものである。さしずめ伝統文化の保存運動を見ればあきらかであるが、近代化を前提としながら伝統的なものに立ち返るのである。それゆえ前進でもあり後ずさりでもあるという二重性を示す。またその点で近代化の必然的な一つの側面でもある。そこに民俗学が発生した所以もあり、また深刻な局面としてはナチズムとの相乗も重なる。このバウジンガーの考察については、本書に先だって『フォルクスクンデ・ドイツ民俗学 ― 上古学から文化分析の方法へ』の翻訳を上梓し得たので、詳しくはその解説に委ねたい。

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの学史に因んでバウジンガーを挙げたのは、両

21) 前掲書（拙訳）を参照、バウジンガー（著）河野（訳）『科学技術世界のなかの民俗文化』、特に p. 64-80.; また＜退行＞概念の解説を含む次の拙論を参照、「現代フォークロアの理論 ― ヘルマン・バウジンガーの＜科学技術世界のなかの民俗文化＞に寄せて」2004年3月 愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』第12号, p.59-70.

者のあいだにある種の交流が見られることに注目しておきたかったからでもある。ヴェーバー＝ケラーマンの第二版を見ると、初版の後に現れたパウジンガーの見解が取り入れている箇所がかなり見られる。ヘルマン・パウジンガーは現代フォークロアを本領すると見られるが、啓蒙主義時代にも造詣が深く、これまであまり注目されなかった人物や著作の掘り起こしも多い。それらがヴェーバー＝ケラーマンの第二版で活用されている。しかしまたヴェーバー＝ケラーマンの立場からは、学史の1969年の初版の構想がパウジンガーに刺激をあたえたという自負もあったようである。その点では両者には思想的に交流があり、その上で互いの立脚点と手法の違いを押し出したと言える。ちなみに立脚点の違いが特に表面化したテーマは、ナチ時代を生きた民俗研究者たちの評価であった。それは本書の第5章においてヴェーバー＝ケラーマンがパウジンガーとその高弟のヴォルフガング・エメリッヒの姿勢に厳しい言辞を投げていることによく表れている。＜共和国の市民という安全な立場にあった、ナチ時代を生きた学究たちを抵抗したかしくなかったと単純に分類するシニカルな姿勢＞をたしなめるのである。諒とすべきは諒とし、反論・批判すべきときは決して遠慮しないという姿勢においてメリハリを利かせた論述である。同時に両者が互いにその独自性と、それぞれの学派を率いるリーダーとして認め合ってもいたことをうかがわせる。

(5) インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン(他・著)『ヨーロッパ・エスノロジー』の具体例から

以上はやや概括的に特色を指摘したが、最後に、具体的な記述における特色を幾つか挙げておきたい。もっとも、それまた、第二次世界大戦後のドイツ語圏の民俗研究を代表者との相互関係のなかで考えるのがより分明にもなり、また実情にもかなっていよう。すなわち、レーオポルト・シュミット(1912-81)、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン(1918-93)、ヘルマン・パウジンガー(1926-L)である。この3人の他にも、看過し得ない数人が数えられようが、それぞれが単独でドイツ民俗学史を執筆したことでは、やはり傑出した存在と言ってよい。学史とは、その専門分野が何であるかを歴史の形で解明し呈示することだからである。

a. 労働し、抵抗するものとしての民^{フォルク}

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの民俗観の骨子の一つは、はじめにもふれたように、ロマン派、さらにネオロマン派の思潮に彩られた民俗理解を、リアルな歴史的・社会的条件に置きなおして解明すること、したがってドイツ民俗学を覆っていた神話学のヴェールをひきはがす作業でもあった。それは必然的に、(邦語の民に^{たみ}近い語感をもつ)“Volk”をリアルな実在者として把握することともなった。これ自体は、戦後のドイツ民俗学界

において、少なくとも改革を目指した人々には共通した問題意識で、またその課題にどのように対処するかでそれぞれの特色が発揮されたのであった。たとえばカール＝ジーグスマント・クラマーが“Volk”を“kleine Leute”と言い換え²²⁾、またヘルマン・バウジンガーが、同じく＜Volk＞に限定語を付して“einfaches Volk”と表記したのは²³⁾、その端的な表れである。

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの場合は、先ずは民^{フォルク}を特に労働の民（Arbeitsvolk）として把握する行き方として結実した。それは、民衆を、それぞれの時代のリアルな社会的条件や支配構造の末端の様相との関わりにおいて観察することに他ならなかった。『収穫習俗』は、神話と習俗を持ち伝える民を、同じデータを読みなおして、労働と労働者の権利を主張する民を浮かび上がらせると試みであった。注目すべきは、その視点の赴くところ、民俗学の対象を農民に限定せず、都市民にも関心が延びていったことである。『ヨーロッパ・エスノロジー』において、ヴェーバー＝ケラーマンが1848年の三月革命のなかでの民衆の動静を特筆したのは、そうした視点の果実であった。次の一節は、民俗研究者の記述であることを忘れさせるものであり、逆に言えばその民俗研究の特質に改めて気づかせられるはずである。ドキュメントして引用されるカール・シュルツの報告ともども以下にその部分を抜き出してみる。

1848年にフランスで起きた二月革命は政治的・社会的目標を伴った労働者革命であったが、狼煙のごとく国境の彼方に影響をおよぼした。ドイツでは革命思想では果敢に民主主義を闘う市民層になわれて、出版の自由、憲法の尊重、さらに評判の芳しくない支配者の廃位などの諸理念となった。最後の項目の例は、さしずめ自堕落なバイエルン国王であった。フランクフルトのパウル教会堂においてドイツ同盟は＜国民議会＞を開催し、偉大な歴史的瞬間を現出させた。しかし事態がさらに進んで、身分制国家の最終的廃絶や共和制・議会主義憲法を望見するところまで行くや、流血をとまなう社会的騒擾が勃発した。それはとりわけ、バーデン、フランクフルト・アム・マイン、そしてベルリンにおいてであっ

22) この言い方は、例えばK.-S.クラマーの60歳を祝う記念論集のタイトルにもなった。参照、*Das Recht der kleinen Leute: Beiträge zur rechtlichen Volkskunde. Festschrift für Karl-Sigismund Kramer zum 60.Geburtstag*, hrsg.von Konrad Köstlin und Kai Detlev Sievers. Berlin 1976.

23) ヘルマン・バウジンガーが＜素朴な/単純な＞を意味する形容詞“einfach”を選んだのは、庶民を指す言い方として“einfaches Volk”が行なわれていることに加えて、人間が＜民衆＞として自己を表出する場合は、それは、多様・多重な内実を＜素朴＞な様式において行なうことに他ならないとする見解によっている。これは、『科学技術世界のなかの民衆文化』におけるテーマの一つでもある。

た。ベルリンの三月革命については、行動的な民主主義者であったカール・シュルツが回想録のなかで、その悲惨な成りゆきを描いている。シュルツは、革命が挫折した後、アメリカ合衆国へ逃れて、その地で共和党员となり、エイブラハム・リンカーンの大統領選出（1860年）にも貢献のあった人物である。

運命の日である3月18日の午後、王宮前の広場に夥しい数の群衆が、喜ばしい知らせを聞くとして集まってきた。国王がバルコニーの姿をあらわすと、熱狂的な歓呼が湧きあがった。国王は群衆に向かって話そうとしたが、聞き取れなかった。しかしほとんどの人々は民衆の要求が聞き入れられたと思い、お祝いの祭りをはじめる気分になっていた。そのとき大声で叫ぶ者があった。王宮の周りに配置されて、国王と民衆を隔てているかにみえる軍隊を退散させろと言うのである。群衆の様子には、その要求も容れられるであろうとの気持ちがありありとうかがえた。なぜなら、押し寄せる群衆はやや難儀をしてではあれ、軍隊のあいだを突破しはじめていたからである。そのとき太鼓の連打がとどろいた。しかしそれもはじめは軍隊を退かせるための合図と受けとめられた。しかし退くどころか、騎兵と歩兵が隊列を整えて群衆のなかへ割り込んできた。王宮前広場から人々を一掃しようとの措置であることはあきらかだった。歩兵隊のなかから二発の銃声が響き、一瞬のうちに場面は恐怖に変わった。

<裏切りだ、裏切りだ>。つい先ほどまで国王に向けて歓呼していた群衆は、今や声を張り上げてこう叫びあい、手近な街路へと雪崩を打って駆け込んだ。どこもかしこも怒りの声でいっぱいだった。<武器だ、武器を取れ>。たちまち街路という街路はバリケードで塞がれた。敷石は地面からひとりでに浮き上がるかと思えるような調子で積み上げられ、たちまち胸壁へと変わっていった。その上に、黒・赤・ゴールドの三色旗がひるがえった。胸壁の内側ではあらゆる階層の市民たち――学生、商人、藝人、労働者、博士、弁護士――があり合わせの武器で防衛に急いでいた――ライフル銃、猟銃、ピストル、槍、サーベル、斧、ハンマー、等々。この蜂起には、準備も計画も定まった方法もなかった。誰もがただ共通の本能に従っているかのようだった。やがて軍隊に攻撃の命令が下った。激しい衝突が起き、軍隊がバリケードを奪取したときには、次のバリケードが軍隊を睨みかえしていた。――それが奪われても、また次ののができていた。バリケードの内側では女性たちが、負傷者の介護や、戦う男たちのための食べ物や飲み物の準備に立ち働いていた。子供たちが懸命に銃弾を流し込みでつくったり、銃を装填したりしていた。物凄い夜だった。街路のあちこちで夜どおし大砲がとどろき、銃声がこだました。

国王をはじめ何が何でも蜂起を鎮圧せずにはおかない決意だったらしい。しかし市街戦がおさまる気配をみせないことに直面して、事態の深刻さを思い知らされた。報告が

とどくたびに、国王は心痛をいらだった。戦闘中止の命令を出したかと思うと、たちまち続行を命じていた。真夜中を過ぎてから、ようやく彼は自ら声明文を書いた。＜余がベルリン市民に告ぐ＞。彼は、こう述べた。今回の騒乱は二丁の銃が火を噴いたことに端を発するが、まったく偶発である。しかるにこれを故意に曲解した者共がいる。＜一団のならず者、その多くは外国人だが＞、その連中が善良な市民を惑わして、おぞましい衝突にまで引き込んだ。次いで、国王は、蜂起した者たちがバリケードを撤去したなら、軍隊を撤退させることを約束し、声明をこんな文言で結んだ。＜汝らの国王の告げる父なる声に耳を傾くべし。我が忠実にしてうるはしき都市ベルリンの市民よ。事件を忘れるがよい。余もまたこれを忘るにつとめ、余の心底に秘めおかん。そは、プロイセンがドイツ人に範たるべき偉大な未来のためなり。汝らの女王にして慈母、かつ汝らの友たる妃また心痛に伏したるも、衷心涙を抑へ難く余と願ひを同じくするものなり。フリードリヒ・ヴィルヘルム＞。しかし声明は所期の目的に達しなかった。大砲とマスケット銃でこれに応えた闘う市民たちは、＜一団のならず者と、その軽率なる犠牲者＞という国王の名指し方に憤慨した。

3月19日、すなわち日曜の午後メレンドルフ将軍が蜂起した人々の捕虜となり、ここにおいてようやく軍隊の撤退が命じられた。軍隊をベルリンから退去させ、またプロイセンは広く国民的民主主義の上に立つて出版の自由と憲法を定めることを合意内容として平和が回復した。軍隊がベルリンを去った後、古今の革命を見渡しても、意味深長かつ劇的関心をそそる点でこれを超えるものはあるまいと思えるできごとが起きた。男も女も、それに子供たちをも併せた荘重な行列が静々と王宮に入ったのである。男たちは棺台をかついでいた。それは市街戦で斃れた戦士たちだった。――無残な切り傷、ぱっくり開いた傷口がむき出しになり、その周りに月桂樹や不凋花やその他の花々で飾られていた。行列は押し黙ったままゆっくりと王宮の中庭に入った後、棺台が整然と並べられた。不気味な死体のパレードだった。棺台の間には男たちが立っていた。破れた衣服、火薬で真っ黒になり、血潮のこびりついた男たちの顔。その手はバリケードで闘った武器をまだ握りしめている。傍で、女性や子供たちが死者を悼んで泣いていた。大勢の人々の重苦しい呼び声にうながされて、フリードリヒ・ヴィルヘルムは上階のギャラリーに蒼ざめた動揺した姿を見せた。彼の横では王妃がすすり泣いていた。声がとどろいた。＜帽子をとれ＞。国王は、死者を前にして被り物をとった。（カール・シュルツ『回想録』*Lebenserinnerungen*.1906, S.123ff.）

一読して分かるように、1848年に焦点を合わせた詳細な記述である。これほど具体的に取り上げられるのは、『ヨーロッパ・エスノロジー』のなかでも特殊であるが、それには理由がある。一つは、不発に終わった革命が長期的には民衆史の観点からも大きな転換点

であったことである。もとより生活文化の変遷は政治的な大事件によって截然と区分できるものではないが、また政治的な節目と無縁ではあり得ない。その点では、その後、ドイツ民俗学界では、1848年を曲がり角として民衆事情の歴史的变化を考えることがテーマとなってゆくが²⁴⁾、それに弾みをつけた考察ともなっている。二つには、それに加えて、三月革命は、学問としての民俗学の展開の面からも大きな意味をもっている。それは、ドイツ民俗学の形成にとって欠かすことができない人物の出発点だったからである。ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールである。

b. 学史理解の要点：ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールの評価

先に引用した記述は、『ヨーロッパ・エスノロジー』のヴィルヘルム・ハインリヒ・リールを取り上げた章の一節にほかならない。リールは、ドイツ民俗学史のなかで、神話への遡及と神話的淵源に価値をもとめるロマン派の民俗理解に軌道修正を迫ったことによって特別の位置を占めている²⁵⁾。ちなみに、ドイツ民俗学がナチズムとの相乗に陥り、それがゆえに戦後は戦争加担などの責任を免れえなかったのも、古ゲルマンの世界を仮定して、そこに判断基準をもとめるロマン派の民俗学、またそれを教条化したネオロマン派の民俗観のためであった。それゆえ、同時代の民衆のリアルなあり方を直視することを重視した民俗研究は、第二次世界大戦後のドイツ民俗学の再建では指標ともなり、＜リールに帰れ＞が叫ばれた。リールの全貌を民俗学の観点から把握しようとする大部な研究が現れたのも、そうした問題意識を背景にしていた²⁶⁾。しかしまたリールは保守的な思想家であり、ジャーナリストでもあった。しかも、リールの原点は1848年の革命との出遭いであった。自ら創刊した地方新聞に郷土でもあるナッサウ公国での革命の推移を活写したのが出発点で、そこでリールは自己の思想的な立場を見出した²⁷⁾。それは、＜二度と革命騒ぎを起こ

24) 一例を挙げると、ベルリン大学で民俗学/ヨーロッパ・エスノロジー学科を主宰するヴォルフガング・カシュバと、同じくゲッティンゲン大学で民俗学科教授となったカロラ・リップ女史が初期の研究テーマとして南西ドイツ地方の1848年革命の民衆史的解明を手がけたことを挙げておきたい。参照、Wolfgang Kaschuba / Karola Lipp, *1848 - Provinz und Revolution. Kultureller Wandel und soziale Bewegung im Königreich Württemberg*. Tübingen 1979.

25) その事情については次の拙論でも取り上げた。参照、「＜民俗学＞の形をドイツ語圏の学史に探る」(1)(2) 愛知大学一般教育研究室『一般教育論集』第37, 号 (2009), p. 45-76, 第38号 (2009), p.9-32.

26) リールの人生と事績については、ゲラムプによる次の浩瀚な研究を参照, Viktor von Geramb, *Wilhelm Heinrich Riehl: Leben und Wirken*. Salzburg: Otto Müller 1954.

27) リールがこの認識を直接的に結実させたのが主著の一つ『市民社会』(*Die bürgerliche Gesellschaft*, 1864)で、序文をはじめ随所に保守改革派としての使命感とその動機が表明されている。

させてはならない>として、不発に終わった三月革命に社会が崩壊しかねない危険な兆候を見たのである。もっとも、リールは保守派と言っても頑迷ではなく、民衆が革命に走る理由をも理解していた。それゆえ政治が民生を重視すべきことを説き、同時に民衆から、彼らを革命へと扇動する<根なし草の知識人>を切り離すべきことをも力説した。かかる意味でリールは保守派であり、また社会改良の思想家であったが、後者の点で特別のプランを提示したわけではない。

注目すべきはインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンが、そうしたリールの問題点をも含めた全体像を問題にしたことである。先に引いたのは第二版（1988）のものであるが、簡潔な初版（1969）においてもその姿勢はすでに明らかである。これはドイツ民俗学の学説史の面からも重要である。と言うのは、リールを肯定するだけでなく批判的に見ることも含めて評価する視点が今日では一般性を得ているのは、ヴェーバー＝ケラーマンの学史の初版によって切り拓かれた面があるからである。すでに初版において、思想家としてのリールを、同じく1848年の革命を（少なくとも一つの）原点として思想形成を行なった同時代人カール・マルクスと対比してもいる。図式的に言えば、三月革命に、カール・マルクスは民衆による未来を遠望し、リールは破壊を見たのであった。その対比は、民俗学史の里程標であるリールの講義録「学問としてのフォルクスクンデ（民俗学）」（1858年）を、ほぼ同時期に現れたマルクスの『経済学批判』（1859年）における社会観と対比していることにも表れている。もっとも今日から振り返ると、この20～30年ほどの世界の動静、とりわけソ連邦の崩壊の後、マルクスへ関心は著しく低下している。それ自体は硬直化した社会主義思想の脈絡で過度に尊ばれたことへの反作用として致し方がないが、カール・マルクスが思想史上の巨峯であることは変わらない。ヴェーバー＝ケラーマンが学史の初版を著した頃は、ソ連邦も東ドイツも厳然と存在しており、それは勢い労働者国家を建前とする東ドイツへの理解にもつながった。そこにはまた、ヴェーバー＝ケラーマン女史が、終生、師として仰ぎ惚んだアードルフ・シュパーマーが東ドイツの民俗学の定礎者となったこと、さらに女史自身も1960年代半ばまで東ドイツの研究組織で活動していたことも関係していたであろう。旧・東ドイツは、後に暴露されたように非民主的な警察国家であったのであろうが、それと並行して社会主義の理想に燃える人々が国内にも国外にもいたのは一方の事実であった。

とまれ、ヴェーバー＝ケラーマンの学史がリールを肯定・否定の両面から考察した意義は大きかったのである。批判的な視点において里程標となる研究がその後あらわれたことからそれは言い得よう。目安を挙げれば、1971年に刊行されたヘルマン・バウジンガー

28) 前掲の拙訳を参照、バウジンガー『フォルクスクンデ』第一部5節「保守的な社会理論としての民俗学」(p.55-64)。

の『フォルクス Kunde』は4部構成の第一部が学史にあてられ、そこでリールが批判的にとりあげられている²⁸⁾。また1978年にハンス・モーザーが発表したリールの観察記録の構造にかかわる研究などである²⁹⁾。民俗研究の今後が問題にされるとき、議論がリールの再検討のかたちになるのは、ヴェーバー＝ケラーマンも重要な一翼をになって形成されたドイツ民俗学界のトposですらあり、それは今日なお続いているほどである³⁰⁾。

C. ウィーン学派とスウェーデン学派の対比

カール・マルクスと対比させてリールを洗い直す手掛かりを作ったのと同じく、民俗研究におけるウィーン学派をスウェーデン学派と対比させて、問題点を浮かび上がらせたのも、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの工夫であった。もっとも、この対比が導入されたのは第二版においてであった。初版では章名も「ウィーン学派」となっていて、その見出し通りの記述であった。またここで扱われる諸点は、いずれも先人があるため、独自性はその組み立てと観点の異同にあるであろう。

ここでウィーン学派と呼ばれるのは、19世紀の末からウィーンで活動したエスノロジーと民俗研究の関係者が見せた相互に近似した傾向を指している。それは期せずして近似していたと言ってもよい。それを付言するのは、一人のリーダーの下での学派とは言い切れないからである。指標的な人物を挙げると、第一は民間のエスノログであったハインリヒ・シュルツとその影響を受けた人々および類似の運動グループ、第二はウィーン大学のゲルマニスティクの主任教授であったルードルフ・ムーフとその学派、第三はウィーン民俗博物館を拠点とする研究者グループであった。これらの個人やグループは必ずしも相互に直截的な連携を保っていたわけではなく、またその研究や著作の質も不統一で、素人論議から、アカデミックな場で生成したまで振幅が大きい。しかしまた相互の異同は多分に漸層的である。以下では、ムーフの門下で、戦後も社会的に復活を果たして、ウィーン学派の伝統を近年まで継続させたオットー・ヘーフラーに関する記述を、見本として挙げる。

この方面の最も重要で甚大な影響力をもった代表者は、ゲルマニストオットー・ヘーフラー*で、著作『ゲルマン人の祭祀的秘儀結社』と『ゲルマン連続性問題』によって1930年代初期の民俗学に新たな危険なアクセントを加えた。ヘーフラーが証明しようと苦心したのは、ゲルマン人の時代から今日まで続く巡回行事が伝説に反映されている

29) Hans Moser, *Wilhelm Heinrich Riehl und die Volkskunde. Eine wissenschaftsgeschichtliche Korrektur*. In: *Jahrbuch für Volkskunde*, 1 (1978), S.9-66.

30) 2009年にフライブルク・イム・ブライスガウで開催されたドイツ民俗学会の大会でも、リールの再検討がテーマとなり、ベルンハルト・ツォーフエン (Bernhard Tschofen) が企画したシンポジウムでは、コンラート・ケストリー (Konrad Kästlin) などがパネラーであった。

との主張であった。ヘーフラーによれば、ゲルマン人の生活の中心として、また途方もない力をもつ宗教的・倫理的、さらに歴史を貫流する政治的な諸力の源泉として不気味な作用を及ぼしてきたのは、結盟団体に対するデモーニッシュな英雄信奉、殊に結盟団体と祖先の死霊との忘我的な一体化であった。しかも、この信奉における存在感覚の昂揚を支配しているのは混沌ではなく、秩序である、と言う。重要なのは＜社会的信奉＞であるが、これが紐帯としての共同体と祖先とを構造化することによってはじめてこの社会的信奉を担う同盟結社に存在の確かさを付与するのであるとも言う。ヘーフラーは、特にスカンディナヴィア系の証明材料をふんだんに用いて、＜信奉的な共同体形態の類型学＞を提示し、それによって＜この種の信奉の連続性＞が途切れないものであることを証し、またそれによって＜私たちの歴史がもつまとまり＞を証明することを志向した。ドイツ人の歴史観を支配しているのは、ゲルマン的上古とキリスト教的中世のあいだの断絶であるが、＜文化伝統の射程の大きい統一性＞という考え方に慣れることこそが必要であると言う。なお＜連続性＞とは、生き方そのものの本質に他ならない、ともされる。それは二つの意味においてであり、一つには文化形態の独自の延命という意味（その事例として彼はオーディンの槍**を挙げる）、二つには＜民族体性の核＞とその創造性の命脈としての＜有機的な意味＞においてであると言う。この連続性の概念は、本来、ウィーンの歴史家アルフォンス・ドブシュ***が、古典古代の文化要素がゲルマン的黎明時代とドイツ中世を通じて生き続けたと定義したことに由来するが、ヘーフラーはそれをイデオロギーへと歪曲したのである。すなわちゲルマン上古の文化的諸現象が現代まで生きながらえており、しかもその意味内容までが恒常不変にある、と言う。すなわち＜文化創造の存続＞という考え方で、しかも担い手は絶えず新しく入れ替わる＜商品＞としてこれらの諸々の文化形態に流れこむにすぎないとされる。このゲルマン連続性のテーマが開示する想念世界は、イデオロギーにどっぷり浸った学問理解を俟ってはじめて理解できる体のものである。要するに、民話や神話や、それに脈絡なく拾いあげた古文書資料、こうした現存の伝承形態をもとに、循環論法をもちいて、始原に近い古体を証明したとし、さらにその土台の上にふたたび連続性を想定するのである。かかるアクロバットじみた思考が進行するなかで、事実に立脚した学問的な民俗学を志向してきたそれまでの努力は忘却の淵に沈んだかの如くであった。

*オットー・ヘーフラー（Otto Höfler 1901-87）：生没ウィーン、ナチ時代にミュンヘン大学教授、戦後は鳴りをひそめたが、後にウィーン大学教授となった。

**オーディンの槍（Odins Spear）：オーディンは北欧神話の主神で、その権威と支配のシンボルである持ち物である槍に対する特殊な観念が永く生き続けたとする。特にその変形としてキリスト教世界に入ってロンギヌスの槍（キリストの十字架上での刑死に用いられた槍）を神聖ローマ皇帝など支配者が支配と資格の標識として

求めたという脈絡が強調された。

***アルフォンス・ドブシュ (Alfons Dopsch 1868-1953) : 生 *Lobositz* = Lovosice
現チェコ没ウィーン、ウィーン大学教授。

なお、そうしたウィーン学派の構成とそこでの個別の特色や相互の関係を批判的に解明したのは、自身も広義のウィーン学派から出たレーオポルト・シュミットであった³¹⁾。インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの記述はウィーン学派批判にかんする限り概ねレーオポルト・シュミットの学史研究をなぞっている。＜民話や神話や、それに脈絡なく拾いあげた古文書資料、こうした現存の伝承形態をもとに、循環論法をもちいて、始原に近い古体を証明したとし、さらにその土台の上にふたたび連続性を想定＞したという記述では、＜循環論法＞というキーワードもレーオポルト・シュミットの表現である。細かく見れば、後者はそれをローベルト・シュトゥムプフルの評価に際してもちいたのである。参考までに、レーオポルト・シュミットのその箇所を挙げる。

この学派全体の主要テーマは、リリー・ヴァイザーの『古ゲルマンの若者聖別と成人男子の組織』に端的にあらわれている。しかしこのテーマに最も深くのめり込んだのは。オットー・ヘーフラーとその著作『ゲルマン人の宗教的秘密結社』であった。この方向の特徴は、イギリスの学界が早くから提唱していた、習俗は語りもののモチーフに先行するという仮説である。とりわけ＜死霊の群行＞なるモチーフ複合がこの観点から絶えず議論的になり、若者組の慣習を反映していると解釈された。この＜儀式論者＞と＜神話論者＞との対立点は、またムーフ学派とヒュージング学派の永い対立の背景でもあった。スカンディナヴィアの影響をも受けた儀式重視論は、ヘーフラーにおいて頂点に達した。もっともこれ以外では、彼はムーフの仕事の上古学の側面をひたすら継承発展させた。これに対して、リヒャルト・ヴォルフラムは、成人男子結社という広い分野から特に剣踊りの現象を選んで、1936年に『剣踊りと成人男子結社』を表した。ヘーフラーとヴォルフラムは、共にスカンディナヴィアの研究動向に強く接近したが、この二人にあっては、当時のオーストリアの習俗（民俗行事）研究がとうてい果たさなかった、程度の高い素材見通しと、諸テーマをめぐる細かな分類がおこなわれている。またローベルト・シュトゥムプフルは、民俗的な劇行事の問題をおなじく徹底して究明して、1936年に『中世演劇の起源としてのゲルマン人の信奉行事』を著した。しかしフレイザー時代のイギリスのフォークロア研究がすでにそうであったのと似て、ここでも循環

31) 次の拙訳を参照、レーオポルト・シュミット（著）河野（訳）『オーストリア民俗学の歴史』名著出版 1992（Original: Leopold Schmidt, *Geschichte der österreichischen Volkskunde*. Wien 1951）. この後の引用文はp.214-215.

論法がもちいられている。すなわち、諸々の残存形態から上古形態を推論し、その上で歴史的諸現象をその証明材料とみなすという行き方である。もっとも、中世の典礼劇がゲルマン人の行事に遡るという考え方を証明することには、シュトゥンプフルも成功しなかった。この学派の代表者たちのなかでも、彼のばあいには、カトリック教会に対する反撥と、他方すべての価値をゲルマン性から導き出す傾向がことほか顕著である。このようにナショナリズム的民俗学のなかの最も客観的な分枝においてすら、ゲルマン性称揚の影響は歴然としていた。

レーオポルト・シュミットが、ウィーン学派を批判する作業の先鞭をつけたことは、この一節からも知られよう。そこでは、ドイツ語圏の動向だけでなく、フレイザーに代表されるイギリスのエスノロジーの問題性も併せて指摘されている。この学史の刊行は1951年と早く、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンにとってもヘルマン・パウジンガーにとっても学史理解においては先行者であった。またオットー・ヘーフラーやリヒャルト・ヴォルフラムについて付言すると、二人は、レーオポルト・シュミットにとって、ムーフの下での同門の先輩であった。さらに両者ともやがてウィーン大学教授となって社会的に復帰を果たしたことも人間関係をいっそう難しくした。事実、ウィーン大学へ出講したレーオポルト・シュミットと二人の先輩との確執は彼らが死去するまで続いたのである。なお言い添えれば、ローベルト・シュトゥンプフルは、ウィーン出身ながらベルリン大学のユーリウス・ペーターゼンの下でゲルマニスティクを学び、そこで『中世演劇の起源としてのゲルマン人の信奉行事』を仕上げた。おそらく三人のなかでは最も俊秀であったろうが、この大著の直後、交通事故で夭折した。ちなみにプライベートな面では、この数年若い同士を敬愛していたヘーフラーは、シュトゥンプフルの未亡人と結婚した。また後に共にウィーン大学教授となったヘーフラーとヴォルフラムには＜男性結社の双子＞のニックネームがあったように人間関係も親密であった。さらにノルウェー人と結婚してオスロへ移ったリリー・ヴァイザー＝オールはウィーンの学風を北欧にもたらし、同地における民俗研究の一方の代表者として戦後も有力であった。

なおインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンの記述と、それに対応するレーオポルト・シュミットの考察を引用したので、ヘルマン・パウジンガーの同じ項目の扱いも参考として挙げておきたい³²⁾。

ローベルト・シュトゥンプフルは1936年に『中世演劇の起源としてのゲルマン人の信奉行事』という網領的なタイトルの一書を刊行した。シュトゥンプフルは、中世演劇

32) 前掲の拙訳を参照、パウジンガー『フォルクスクンデ』p.88-89.

の原型がファスナハト劇に具現されていると考えた。彼はまた、それを＜豊饒魔術の機能＞から導くと共に、信奉性の強い早春の祝祭に登場する＜男根信奉につながるデーモンの群＞、またそれを引き継ぐ＜艶笑譚＞から説明した。しかし伝承され活字化された何百という古いファスナハト劇のテキストを検証しても、そうした信奉につながるような要素はみとめられない。たしかに劇行事には短いレビュー的な仕草が入っており、また演劇には性的なほめかしや開けっぴろげな大らかさもありはするが、それらは因襲に対する粗野な爆発である。成立時期から見ると、それは市民的な（これはこれで多分に因襲的でもあった）世界に典型的であった。ファスナハト劇（あるいは多様な諸々のファスナハト劇）に見られる形態上の特殊条件は、素材的には（市民的な）文藝の性格にあることが判明する。加えて、演劇の社会的背景もシュトゥムプフルのテーゼとは食い違っている。ファスナハト劇は、農民の世界とは関係が無く、都市の手職者たちによって演じられたからである。

かかる検証から免れるものがあり得たとしても、なお忽せにすべからざる異論が残る。すなわち、ファスナハト劇が確認されるのは、ようやく中世後期である。この点から出発するなら、これまた劇的な証拠にぶつかることになる。ファスナハト劇は、ほとんど例外なく宗教劇であり、典礼の厳格な枠に組み込まれていたものであり、仕草の幅が広がるにつれて、宗教劇の枠に少しづつ穴が開き、世俗性が付着したのであった。シュトゥムプフルが立脚したのは、その付着物であり、緩みによって生成した諸場面であった。それをよく示すものとして、例えば復活祭劇における＜香油屋の場面＞や、使徒たちがキリストの墓へ向かって競走する場面などを挙げることができよう。しかしシュトゥムプフルは発生を逆転させて、そうした場面にこそ、ゲルマン性に胚胎する起源的な核がひそんでいるとみなしたのであった。しかもその核は、キリスト教が重なることによって覆い隠され、中世後期のファスナハト劇のなかで再び噴出したと言うのであった。

この見解も、オットー・ヘーフラーが1930年におこなった講演のなかで準備されていたものであり、そのときすでにゲルマン的なアクセントが決定的となっていた。そこでは、方法論上の欠陥や連続性という要請をめぐる短絡は少しも問題にならず、ひたすら古ゲルマン文化は常に現存するものと解されたのである。・・・

問題点が丁寧になぞられ、民俗行事を古ゲルマン性の遡及させる論法の化けの皮がはがされてゆく。その批判作業の骨子が、レーオポルト・シュミットが＜循環論法＞と看破したことにあることもまた明白である。

インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンもヘルマン・パウジンガーも、レーオポルト・シュミットの批判の不足を指摘することがあるが、それは反対の理論と言うより、研究の積み上げと見るべきであろう。

d. ヨーロッパ・エスノロジーの視点

中身の点ではドイツ民俗学史にあたる本書がヨーロッパ・エスノロジーのタイトルを冠していることについてもふれておかななくてはならない。これは直接的には、マールブルク大学の民俗学科にあたる研究室がこの名称をもつことと関係しているが、それ自体がドイツ民俗学の推移とかなっている。大きな背景では、とりわけフォルクスゲンデがナチズムとの相乗に陥った過誤を重く見て、フォルクスゲンデやフォルクの派生語を避けようとしてきた第二次世界大戦後の一貫した傾向を受けている。またそれ自体が幾つかの波をつくって進行した。その辺りの事情は、本書のなかでは次のようにふれられている³³⁾。

1955年のアルンハイムでの民俗学大会を機に、国際的に通用する新しい専門学の名称をもとめる声は、時を追って高まりを見せた。しかしドイツで真剣な意図が現実化するの、なお1970年代初めまでまたねばならなかった。ドイツ民俗学会、およびその大学教育と研究体制のための常設委員会が召集したファルケンシュタインでの特別討論会（1970年）がそれである。この討論会の参加者たちは、いわゆる＜ファルケンシュタイン決議＞として提案を行なうことで一致した。そこでは名称の変更がはっきりとうたわれており、文化人類学（Kulturanthropologie）、文化研究（Kulturologie）、あるいはヨーロッパ・エスノロジー（Europäische Ethnologie）といった名称が特に推奨された。それに続いて、ドイツ民俗学会の会報（dgv-Mitteilungen）において、かなり長期間にわたりそれぞれの研究機関の立場をめぐって議論が交わされた。しかしなお統一的な名称変更には行き着かなかった。ヨーロッパ・エスノロジー、文化人類学、経験的文化研究（empirische Kulturwissenschaft）などが有力となる一方、依然、フォルクスゲンデや比較民俗学（vergleichende Volkskunde）や、それに類した名称もおこなわれている。なおこの種の議論をうながした外部の影響力として見落とせないものに、近隣のヨーロッパ諸国での専門誌の名称変更があった。『エトノロギカ・スカンディナヴィカ』（*Ethnologica Scandinavica*）、『エスノロジー・フランセーズ』（*Ethnologie Française*）、『エトノロギア・スラヴィカ』（*Ethnologia Slavica*）、『エトノロギア・ポロナ』（*Ethnologia Polona*）などで、これらはいずれも国際的な相互理解を念頭に置いて、従来の名称をヨーロッパ・エスノロジーの方向へ変更したのである。

こうした努力と並行して、1968年のいわゆる学生運動とそれに続く各大学での大学改革があり、その結果、持続的な構造転換が図られた。そのなかで民俗学もまた、旧来の哲学部の廃止の後、新しい大学の専門構成のなかに置かれることになった。

33) 参照、原書, p.137f. 訳書では p.182f.

この箇所の始めに1970年のファルケンシュタインでの特別討論会（Arbeitstagung in Falkenstein, 1970）が挙げられているが、これについて簡単にふれてる。その企画は、フランクフルト大学教授となってもなくであったヴォルフガング・ブリュックナーの呼びかけによって、ドイツ民俗学会の活動の一環としてプファルツ地方のファルケンシュタイン村（ラインラント＝プファルツ州）において実現した。1970年9月21日から26日までのことで、そこではドイツ民俗学の名称が従来の“Volkskunde”であることの問題性の検討と今後の課題が討議され、またその大会の詳細は準備段階の関係者の手紙のやりとりなどの動きもふくめて一書にまとめられている³⁴⁾。過去の清算と今後を切り開くために学問名称と課題がテーマであった。ドイツの民俗学の機関はこのワークショップをも一つの節目として、“Volkskunde/Europäische Ethnologie”を掲げることが多くなったのである。また議論の中身は、民俗研究が一般的に直面する課題とかかわっていた。具体的な議論の行方では、改革の旗手であり討論にも参加したヘルマン・パウジンガーの理論が大きな刺激となり、またこの企画を機にその影響力はさらに強まった。発言者の半数は改革姿勢をもつ中堅・少壮で、傍聴者にも大学院生が多かったが、その後1980年代に入って発言者たちが学界のリーダーとなるにつれて、ナチズムへの民俗研究者の関与に対する評価をきっかけに互いの見解や姿勢の違いが表面化し、激しい対立に発展した。またその兆候はすでに70年代初めからみとめられた³⁵⁾。しかし今日では関係者はいずれも高齢となり、物故者も少なくない。ちなみにパウジンガーはすでに1999年にくさすがに今となっては、あたかも退役軍人たちがかつての戦場での経験を反芻するのと似ていよう>と記して、当時の応酬の継続にこだわった反目をたしなめた³⁶⁾。とまれ、かかる動静の一環としてマールブルクではヨーロッパ・エスノロジーの名称が選択され、それが本書へとつながるのである。

(6)『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』第三版の問題意識

ところで、今回翻訳を供した『ヨーロッパ・エスノロジーの形成』の底本は主著者の死後の第三版である。第二、三版の間には東西ドイツの統一のような大きなできごとがあり、またそれは民俗学のような広義の学界の一隅にまで研究組織の消滅や改変という結果をもたらしたので、それらがデータとして盛り込まれた新版に拠るのは必然的であった。しかしそれを脈絡づけるのは課題として重すぎた面もあったようである。新しく加筆された第七章がもうひとつ収まりがよくなり、また第八章がまったく文献の挙示にとどまってい

34) 参照, Wolfgang Brückner (Hg.), *Falkensteiner Protokoll*. Frankfurt a.M. 1971.

35) これについては次の拙著を参照, 『ドイツ民俗学とナチズム』2005, p.673ff.

36) 参照, ヘルマン・パウジンガー (著) 河野 (訳) 『フォルクスクンデ』p.293.

るのは、その表れであろう。注目すべきは、第七章においてテュービンゲン大学民俗学科が標榜する〈経験的文化学〉が勢いを強めている現実に対して論評がされていることである。それはどちらかと言えば歯切れの悪いものだが、それが却って学界集情を伝えているとも言える。

学問史の分析のなかで、直接の現今につながる展開を見わたすのは、特別の難しさがある。なおアクチュアルな種々の異なった潮流があり、また民俗学の場合にも多くの出版物があふれており、それが全体を見渡すことを困難にしている。それゆえこの締めくくりの解説では、幾つかの特に明らかな事例を挙げるにとどめる他ない。

専門分野の組織作りは、過去二三十年の間に頂点に達した、すでに峠を越した観もある。大学における新しい学科として設置される動きも活発であったが、昨今では後退気味でもある。つまり、この専門分野でアカデミックな研究にたずさわる人員数は、1970-80年代にめざましい増加を見たあと、学問分野全般のポスト削減に直面して大幅に数を減らしている。その反面、この分野で研究をめざす者の数は非常に多いままであり、それどころかなお増加の傾向にすらある。

1990年代のフォルクスクンデにおける重要な特徴は、学問としての方法論的な自己理解に対応して、視座の変化が起きたことである。それは決してこの分野の孤立した〈希求〉ではなく、人文科学・社会科学の諸分野に共通の動きでもあった。名称変更の波はその一つであり、フォルクスクンデの場合は、この既存の名称に追加名称を並列するかたちをとった。ドイツ語でひろく行なわれることになったのは、統計的にも明らかであるが、〈ヨーロッパ・エスノロジー〉を重ねるという表示である。

しかし、エスノロジーの名称をめぐる議論はあり得ても、近似した響きの名称であるフォルクスクンデ (Volkskunde) とフェルカークンデ (Völkerkunde) を選ぶという動きはほとんど見られない。それに対して、文化研究 (Kulturwissenschaft) をめぐる議論は盛んである。この名称の場合は〈親近な〉分野名と言うわけではなく、むしろ文化学 (Kulturwissenschaft) や文化学的 (kulturwissenschaftlich) の語を組み合わせることによる分野全体の手直しを目指しているところがある。その根拠を特定するのは簡単ではなく、むしろ種々のモチーフが重なっている。むしろそこで危惧されるのは、文化研究というシックな列車に飛び乗る人がかなりいるのはよいが、その停車駅からは、在来この分野への接続が一向に見てとれないとも思えることである。

とは言え、文化研究は、近年めざす人が多く、インフレーションと言ってもよいくらい流行の観があるが、それだけに文化研究と学術政策をめぐる広い場で適切に議論されることがもとめられる。学問名称に付加された概念でも日常語でもある場合には往々みられるように、文化学 (Kulturwissenschaft) も鋭さや正確さや一義性をだんだん失ってき

ている。他方で、目下の語感ではすこぶる前向きの含意の語でもあるため、特に＜現金な＞時代にあつては功利主義的な使い方がなされてもいる。

専門分野としてのヨーロッパ・エスノロジーの展開のなかでは、内容と方法にかかわる多くのファクターが重要な役割を果たした。そのなかには政治状況の推移をも含む外的な枠組みがあり、以下にそれらを挙げておきたい。

1. 社会科学諸部門に接近した最初の局面は、1960年代には、経験的な社会研究の（特に量的な）方法と密接に結びついていた。しかし、1980年代半ばにはすでに、いわゆる＜ソフトな＞方法を取り入れる動きのなかで、量的な方法の低下があきらかになっていった。質を重く見るインタビュー、語りに目をむけた統計手法、緻密な記述、カルチュラル・スタディーなどである。それによって、方法的には解釈学的な手法を特徴とする文化研究が発展に向かう地ならしがなされることとなった。
2. 理論的には、文化的な巨人であるニーチェやカントやシラーなど、またフロイトなどが引き合いに出されること度合いが高まった。それに引きかえ、民俗学の先人たちを受け継ごうとの姿勢はまるで立ち消え、多少見られたとしても、きわめて稀であった。自己の専門のなかの論議を理論形成のための推進力として注目することは絶えてなくなった。代わって、現今の文化哲学や文化社会学（たとえばラケールやブルデュ）がきわめて重くみられる度合いが増えた。専門学としての自己の理論的基礎に立つて発展や応用を図るのではなく、ヨーロッパ・エスノロジー/フォルクスクンデは、理論を産出する学問分枝というより、理論を利用する学問分枝であることがいよいよ明白となっている。
3. 世界情勢の変化への反応：1990年代にヨーロッパと世界で進行した政治的、社会的、そしてエスニックな変化、東ヨーロッパの国家システムの崩壊、戦争と迫害を背景にしてヨーロッパのなかでも（またヨーロッパへの向かう流れとしても起きた）人口流入、さらに止むことのないグローバリゼーション、この十年間を決定づけているのはこれらのファクターであり、それらはまたヨーロッパ・エスノロジー/フォルクスクンデにもさまざまなかたちで持続的な影響をあたえてきた。

ここで先ず数えられるべきは、ドイツ国内のいわゆる＜転換＞（Wende）である。これは私たちの専門分野にとっては、東ドイツの民俗学がドイツ連邦共和国の在来の学問システムに吸収・再編されることを結果し、さらにそれは他の東ヨーロッパ諸国の従来のフォルクスクンデの再編成にもつながった。

ドイツ再統一の状況下で、それまでの東ドイツの学問傾向の評価がおこなわれた。それは一種の査定のような作業でもあった。それは一面では、東側の学問原理の廃棄を意味した。学問が教示される場としての大学、研究機関としての学術アカデミーの廃止で

ある。他面では、政治・党システムとむすびついていたかつての諸機関の解体が課題であった。東ドイツの学問的なフォルクスクンデもその動きに服する以外になかった。顧みると、次の問が立てられよう。東ドイツのフォルクスクンデは、純然たる受け入れとして旧西ドイツの学術システムに継ぎ目なく入っていったのであろうか、それとも東ドイツのフォルクスクンデの少なくとも個々の要素が新たな連関のなかに同化されたのであろうか。

東ヨーロッパの他の国々でも、これと類似のシステム変化にともなう改変や転換や刷新が進行した。しかしドイツの政治状況とは異なり、それまでの分裂国家という問題とは別であった。

4. 人口流入やエスニック・グループやエスニック化過程、またマイノリティの編入、日常生活のヨーロッパ化等々のといった新しいテーマ、さらにアングロ・アメリカ出自の文化人類学・社会人類学の研究方法と理論を強く取り入れることによって、ヨーロッパ外のエスノロジー/民族学（フェルカークンデ）への関わりがもう一度とり上げられ、凝縮した様相を呈することとなった。それは、たとえば文化研究の他の分枝であるメディア研究へも開かれることなどにおいて明らかに見てとれる。

総じて、ヨーロッパを枠とした国際性、さらに諸大陸にまたがる射程も強まっているが、その主たる背景は、統合ヨーロッパが政治的にも高まっていることにある。すなわち、多彩なEU促進プログラムが教養・文化部門にも推進されつつあることが挙げられよう。それに対応するエスノロジーの組織化であるSIEFなども意義と関心を獲得しつつあるのもその現れである。インターネットの可能性がヨーロッパ・エスノロジーの組織とそのメンバーによって活用され、従来なかった広範かつアクチュアルな情報交換に寄与しているのである。

このなかで注目したいのは、経験的文化研究を標榜する行き方への言及である。これは言い換えれば、チュービンゲン学派への批判にほかならない。その箇所では、さらに次のように敷衍されもしている。ドイツ民俗学界の主流への批判を試みた次のような一節もみられる（p.255-256）。

それにしても、この約30年間、私たちの専門分野には何が起きたであろうか。方向を指示するような刺激はどこからやって来たのだったろうか。この分野の機関であるドイツ民俗学会を誰が牽引し、おなじくこの時期に誰が機関誌『民俗学誌』を編集してきたのであろうか。

1968年以来、学問的で公共性をそなえたフォルクスクンデ（民俗学）をドイツだけ

でなくヨーロッパ全体におよぶ影響力をもちつづけてきたのは、ヘルマン・パウジンガーが基礎を築いたチュービンゲン大学の経験的文化研究であり、それが、どの学派にも増して大学の教授陣を多く輩出してきた。

1970年代以来、また同時期のドイツで進行した大学改革のなかで新たにフォルクスクンデの教授ポストを占める人材を（圧倒的多数ではないにせよ）供給したのはチュービンゲン学派であったが、その事実と並んで看過し得ないのは、チュービンゲン学派がきわめて重要な意味をもち、また学界において基準的な重みをもったことである。のみならず、その反響は世界的なものともなったところがある。学問としてのフォルクスクンデがその方向をとったことは、ドイツ内外の多数の専門書によっても、フォルクスクンデの理解のあり方においても、組織の形態においても判明する。

それゆえ、フォルクスクンデはこれを手がける（あるいは手がけてきた）とか、それには未だ手をつけていない（あるいはそれと取り組む責任がある）といった言い方が繰り返されると、チュービンゲン学派が一般的な基準となっている度合いがかなり高いのである。この点で、（フォルクスクンデが根本的には常に別のもの変わってゆくものとして現在の様相をとっているのであるとしても）許容し難いまでの狭隘もそこには起きている。

この一文には、たしかに状況の問題的な一面を突いているところがある。経験的文化研究という名称のもとにとりともなく対象領域が広がっている傾向もみられ、またその方向への広がりこそがフォルクスクンデの本来のあり方といった受けとめ方がなされる傾向はあるであろう。たとえばファースト・フード店の調査と分析などは何種類も現われている。しかしまたそれは経験的文化学を標榜してはいない別の学派においても手がけられているので、かならずしもその専売ではないが、そこで切り開かれた局面において生成した調査研究のテーマとは言い得よう。民俗研究の様相、ないしはその名称のもとに行われる研究の拡散が見渡せないくらいになっているわけである。そうすると、ヴェーバー＝ケラーマンがもし現在の状況を記述していたなら、どんな裁断を示したであろうか、そうした印象をも時に起こさせる。

参考文献を整理して挙げるにとどめている第八章でも、現今がいかに複雑となっているかを改めて思わせるところがある。文献リストではじめて気付かせられる人物や成果が多いのは事実である。それと共に、不足も間々感じられる。しかしどのように整理しても過不足は避けられないであろう。なお言い添えるなら、ヴェーバー＝ケラーマンが単独で執筆した初版では参考文献のリストは非常に限定的で、むしろ論述への力点が圧倒的である。その体裁を現在ただいまの案内書にもとめるのは状況の変化からも無理であろう。むしろ、研究テーマの分岐と、産み出される文献の量的な多さのなかで、一定の構図を描くこ

とできたことに感心させられる。本書は、多少の問題も含みつつも、初版以来のたしかな構図に支えられて、案内書として課題を十分にこなし、また全体として見れば出色でもある。